PISA IN FOCUS 17

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

大都市は教育に恩恵をもたらすか、それとも障害か?

- 大都市は概ね教育に恩恵をもたらす。ベルギー、スロベニア、イギリス及びアメリカなどいくつかの国にはあてはまらないが、都市部の生徒の成績だけを考慮すれば、ほとんどの国で成績が飛躍的に改善している。
- 大都市の生徒の成績を比較すると、ポルトガルとイスラエルの生徒はシンガポールと同じ位良くできているし、ポーランドは香港と同じ位できる。

数え切れないほどの政策立案者や研究者が、PISA2009年調査の読解力得点において上位5位以内に入った香港、上海及びシンガポールの教育システムを視察するために群れをなした。視察者の多くは、これらの教育システムが大都市環境に内在する生徒集団の社会的不均質をうまく取り込んでいるという事実に特に感銘を受けた。それはその他多くの教育システムが必死に実現しようとしているものである。だが、大都市は教育者に社会的難題を提起するのみではない。豊かな文化的環境、教師にとってより魅力的な職場、学校選択の幅、そして生徒の動機付けに役立ついい就職先の可能性といった、学校には重要な強みになるものもまた提供している。都市環境の強みや弱みとなる様々な要因が各国で非常に異なる働きをしているとしても、いくつかの国では都市部(ここでは人口100万人以上の都市としている)の生徒が、PISA調査でトップの成績を収めた都市国家の生徒と同じ様な結果を出していることから、PISA調査の最新の分析ではこれらの強みに注目している。

都市の生徒の成績が国全体の得点を引き上げることが多い…

例えば、どちらかと言えばOECD平均程度の成績であるポルトガルやイスラエルといった国の都市部の生徒は、PISA調査でトップの成績を収める国の1つであるシンガポールに引けを取らない。同様に、ポーランド都市部の生徒の成績は香港の生徒と比べても遜色がない。全般的にOECD加盟国の大都市圏に住む生徒は、学校教育の1年分を超える程度の得点差で地方の生徒を上回っている。

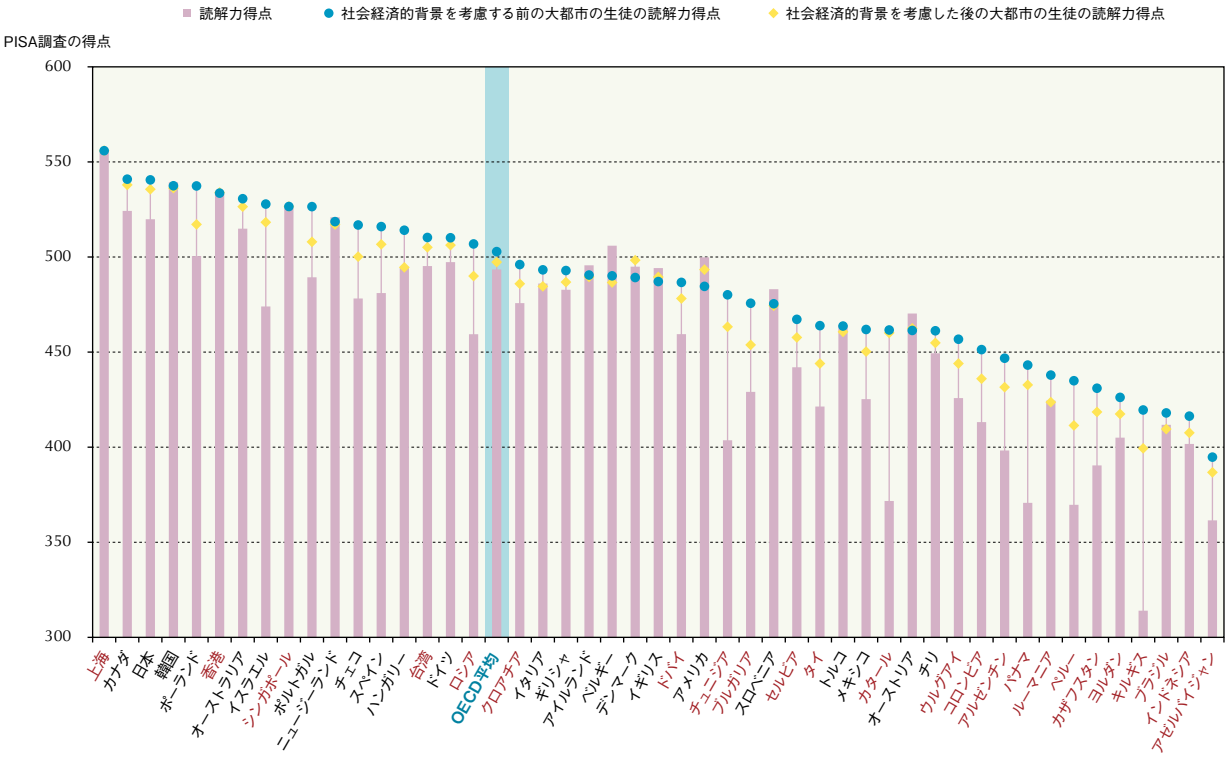
PISA IN FOCUS

学校の立地と関係がある成績の差は、時に所在地の社会経済的状況によるものである。各国内の人口分布は密度やその他の特徴が大きく異なり、異なるコミュニティの生徒がどのような成績を収めたかに関する全国的分析を読み取る時は、それらの違いを念頭に置かなければならない。しかしPISA調査の結果は、社会経済的背景の違いで説明できるのは一部であることを示しており、社会経済的要因を考慮に入れても成績の隔たりの多くが依然として残る。

…しかし、注目すべき例外がある。

都市環境に住む生徒の成績だけを見るとほとんどの国の成績が上昇するが、反対の結果が現れる国が数か国ある。例えばベルギー、イギリス及びアメリカでは、大都市圏に住む生徒の成績が国全体の点数を引き下げている。これは、これらの国では大都市の密集地が提供する利点を、すべての生徒が享受できていないからだろう。それは例えば、社会経済的に恵まれない境遇の場合、家庭では学校とは異なる言語を話している場合、または生活費や支援を求めて頼れる親が1人の場合などである。

大都市は生徒にやる気を起こさせ、刺激を与えることができる



注: 国・地域は、PISA2009年調査における、社会経済的背景を考慮する前の大都市の15歳児の読解力得点の高い順に、左から並べている。
大都市とは人口100万人以上の都市を指す。
社会経済的背景は、PISA調査の経済社会文化的背景指標(ESCS)の平均である。

出典: OECD, *PISA 2006 Database.*

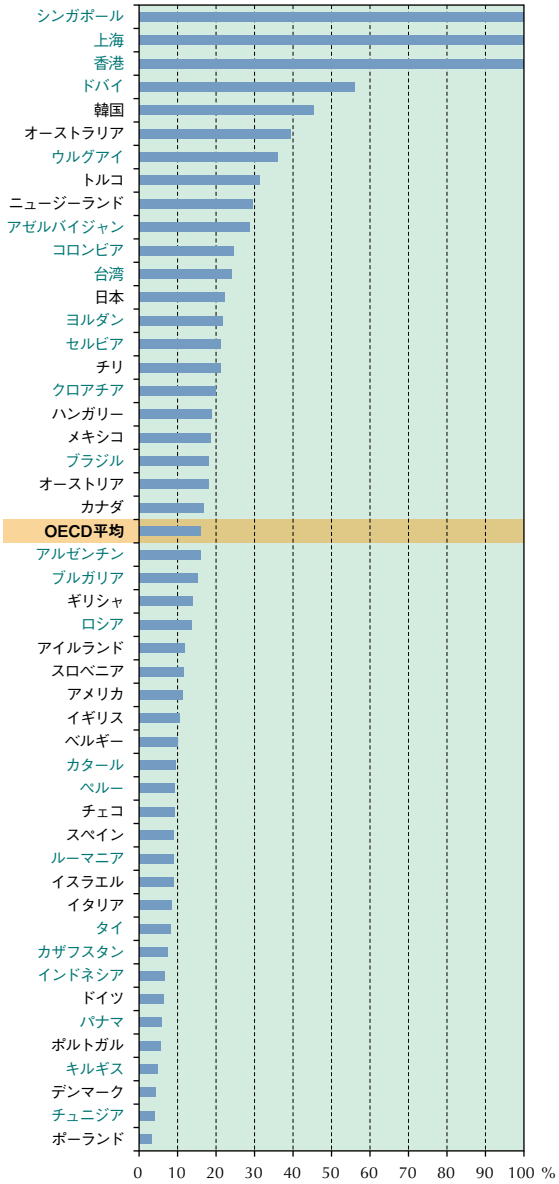
社会経済的格差で説明できるのは、全体の議論のうちごく一部である場合が多い。

成績の隔たりが国ごとにどう異なるかも注目すべき点である。例えば、OECD加盟国の似たような社会経済的背景を持つ生徒を比較すると、チリ、チェコ、ドイツ、イタリア、メキシコ、そしてトルコで都市の学校に通う生徒と田舎の学校に通う生徒との成績の隔たりは45点以上であり、フォーマルな学校教育の1年分を優に超えている。ハンガリーでは、その隔たりが70点を超えている。

カナダ、日本、韓国及びポーランドの大都市圏の生徒、及び香港と上海の生徒は、PISA調査の読解力で社会経済的背景を考慮しない場合、平均得点が530点である。社会経済的背景を考慮しても、カナダ、日本、韓国及び上海のこれらの生徒は最低でも533点で、シンガポールでは平均527点、オーストラリアは526点、そしてニュージーランドとポーランドでは517点である。

フィンランドとルクセンブルグで、国内でも最大規模のコミュニティ、つまり人口10万～100万人未満の都市に住む生徒の平均得点もまた高く、それぞれ543点と564点である。社会経済的背景を考慮に入れると、フィンランドではそれらの生徒の平均得点は537点であり、ルクセンブルグでは平均520点である。例えばポーランドに見られる、補正した成績と補正していない成績との大きな違いは、都市部と地方の社会経済的背景に大きな格差がある証拠である。これは、教育のリソースや文化・教育施設が、地域の社会経済的側面に即してどう分配されるかの違いを映し出しており、これらすべてが生徒の成績に影響を及ぼす可能性がある。

大都市にある学校に通っている生徒の割合



注: 大都市とは100万人以上の都市を指す。
出典: OECD, *PISA 2009 Database*.

そこで、イスラエル、ポーランド、ポルトガルのようにPISA調査で平均的成績の国は、その都市部の生徒が、最も成績のよい教育システムで学ぶ生徒と同等の結果を出していることを知って多少誇りを取り戻すかもしれないが、同時に、その教育成果、教育リソースの分配、そして生徒の家庭環境と関係があるとしても、その学習成果の不平等や不均衡に取り組まなければならない。特にこれらの国の孤立したコミュニティには、集中的な支援と、こうした地域の学校に通う生徒の可能性を最大限に伸ばすような政策が必要だろう。逆に大都市圏の生徒が平均に達していない国は、都市環境が提供する文化的及び社会的恩恵を、それらの生徒がどうすればうまく活用できるか見つけ出さねばならない。そうしなければ、世界の教育チャンピオンリーグに入る機会はやってこないだろう。

結論: 教師にとって大都市にはやっかいな問題もあるが、ほとんどが恩恵となる。大切なのは、生徒全体の社会的不均質を受け入れることと、大都市が提供する豊富な文化的及び社会的好条件を、都市部の生徒すべてが十分活用できるようにすることの両方である。

本稿に関するお問い合わせ先
担当: Andreas Schleicher *(Andreas.Schleicher@oecd.org)*

出典: *PISA 2009 Results: Overcoming Social Background: Equity in Learning Opportunities and Outcomes* (Volume II)

参考サイト:
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ:
「学校が課外活動を提供すれば、生徒はもっと勉強するようになる? 」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。